

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 庵乃音人

挿絵 にの子



登場人物紹介

Characters

リゼッタ・ド・アメジスト

貴族姫だけの学園「王立レグリア女学院」の生徒会長。純粋な性格の持ち主。



ジルエット・ド・イスクリア

女性らしい習い事よりも、剣や乗馬などを愛する男勝りのクールな姫騎士。

エリーナ・ド・モンテリルザ

医術に長けた勤勉な美少女。信仰心の厚いプリンセス。



ミラ・ド・ネステータ

情熱系のメイド姫。学園内にある「メイド研究部」部長。

かさはらりょうた
笠原 遼太

可愛い顔を持つオタクなショタ少年。

プロローグ 青い髪のプリンセス

第一章 貴族姫だけの楽園

第二章 姫騎士のせつない純情

第三章 神官姫の誘惑

第四章 二人だけの舞踏会

第五章 対決の時

第六章 新しい世界へ!!

エピローグ みんな、いっしょ!!

ひんやりとした大気が剥き出しになった下半身を撫でる。もわんつと香り立つ、股間のイカ臭い腐臭。ふにゃちゃん状態の遼太は、包皮の中に情けなく亀頭を埋めた自分のペニスをもろにメイド姫に凝視され、カッと顔が熱く火照るのを感じた。

「へえっ、これが男の人の平常時のオチンチン……キャット♪」

そろそろと萎えペニスに手を伸ばしたミラは、人差し指の先でそれを触る。そしてぐにやりと力なくひしゃげる、熱を持ったタラコのような陰茎の感触に、困惑とも驚きとも、あるいは喜びともつかない声をあげた。一方遼太はといえば——ふにゃちゃんとはいえ（さらに、皮を被ったままとはいえ）、剥き出しの肉茎を美貌の異性にタツチされたことに変わりはない。意に反して股間から全身にツーンッと甘酸っぱい快感が駆け抜け、口の中いっばいにレモン汁の酸味が広がったような落ち着かない気分が膨張する。

「ちよつと……あのっ!？」

「ソフフッ。知ってますのよ、どうすればこのオチンチンを大きくできるのか♪」

艶やかな双眸に隠しようもない淫らな好奇心を滲ませたミラは、遼太の顔に甘ったるい口臭を吐きかけたかと思うと、続いて彼の股間に素早く顔を埋めた。

少年が「えっ!？」と思う間もなく、次の瞬間、彼の身体に生まれてから一度も体験したことのない温かな感触とともに、ビリビリと電撃が走る。

ポニーテールのメイド姫が口の中に彼の陰茎を丸ごと啜え込んだのだ。

「ミラッ！ な、何やってるの……んあああああつ!？」

「何って……ちゅば……ンフッ、ご存じないの？ ちゅう……『フェラチオ』ですわ」

「いや、フェラチオですわって……ああっ!!」

遼太は信じられない快感にうっとり脳髓を痺れさせ、全身に粟粒のような鳥肌を立てた。ナメクジみたいな少女の舌が、口の中に含んだ彼の陰茎をころころと舐め転がす。

「ぴちゃ、ぢゆるぢゆる……んっ、んっ、れろん、れろれる……ぴちゃぴちゃ……」

(な、何これ。ああ、ヌルヌルして、温かくって……き、気持ちいい!?)

亀頭冠を覆った包皮越しとはいえ、ミラの舌にカリ首を擦り立てられ、我知らず募る淫悦。電撃の荒波が繰り返し繰り返し背筋を駆け抜け、メイド姫の一舐めごとに海綿体が苦もなく膨張して肉棹が肥大化していく。

「ぴちゃぴちゃ……んっ!? ま、まあ、すごい……だんだん大きくなってますわあ」

ポニーテールの色っぽい姫君は口の中に絡め取った陰茎の変化を敏感に察し、興味と興奮でその目を爛々と輝かせながら、舐め回すように激しく舌を踊らせて、勃起し始めた陰茎を刺激する。

「んわっ、おっ……おおっ、ああ、だめ、ミラ……まずい……おっ、おおっ……」

舐められれば舐められるほど感度を増す桃色ペニス。むくむくと膨張して硬くなり、あつという間に巨大になる陰茎に、メイド姫は驚いたように目をみはり、口の中に頬ばって

いた肉塊をじりじりと吐き出して美貌を後退させていく。桃色の肉肌に青筋を隆起させながらもの狂おしく勃起する肉茎が、窄めたミラの唇からズルッ、ズルッと溢れ出した。

「ああ、すごい。オチンチンってこうやって硬くなっていくんですのね……ちゅぽん！」
いやらしい音を立て、ミラは口の中からいったん勃起男根を放した。ペしいっ！と湿った爆ぜ音を立て、完全に勃起しきった肉棒が勢いよく遼太の腹を叩く。

情熱的な美貌を興奮で紅潮させた貴族の姫さまは「まあ、遅い……」と驚いたように
眩きながら、カチンカチンに硬くなった遼太の牡茎を細く長い指で怖々と握りしめた。

ツーンツと肉棹から背筋に駆け抜ける電流のような肉悦。少年はベッドに肘をつけてあわてて起き上がりとしたが、メイド姫はそんな彼の胸をとんと押し、再び羽毛布団の上に仰向けに倒すと、ゆっくりと彼の勃起ペニスを上下にしごき始める。

「あっ、ああっ……!? 何するの、ミラッ!? うわああっ……!!」

勃起して感度の増した陰茎をしこしこしごかれ、遼太は思わず情けない呻き声をあげる。リズムカルにしごかれるたびに、ジンジンと甘酸っぱい痺れが鈴口を疼かせた。鋭い快美の火花が次々と股間に閃き、陰囊の中で二つの睾丸がせわしなく揺れ踊る。

「か、硬くて……こんなに熱い。これが……オチンチン。ああ、そしてこれが……!?」
ミラは感激したような熱い声でそう言うと、もう片方の手で少年の玉袋をそっと包んだ。
「ぐはあっ!?」

「……キ、キンタマ……ですわねっ」

妖艶な美貌のお姫様はそう言うのと、片手で肉棒をしごきながら、五本の指をグニグニと開閉させて、遼太の陰囊に優しい揉み込みをする。規則正しいその動きに連れ、頭部のカチューシャでは薔薇の花が、胸元では、たわわな巨乳が上下にいやらしく揺れた。

ムズムズと下腹部を落ち着かなくさせる耽美な快感。少年は夢の中で尿意を覚えた時みたいな恍惚感を感じ、「ううっ」と力なく呻きながらベッドの上で背筋を仰げ反らせる。

「ああ、キンタマは……こんなになっても柔らかいんですね。温かくて……可愛い♪」
遼太の、というよりは男の身体に興味津々らしいミラは、熱っぽく潤んだ瞳で、少年の肉棒と玉袋をしげしげと眺めた。やがて彼女の視線が、陰茎の先端にじっと注がれる。

「……？ 遼太、あなたのオチンチン、図解とちよつと違いますわ」

「え、ええっ？」——何を言いつ出すのか、と少年はメイド姫を見る。

「……どうして、あなたのチンチンの先っぽには皮が被っているんですの？」

そう言いながら、お姫様は不思議そうに小首をかしげて長い人差し指を伸ばし、遼太の亀頭の下半分ほどを覆っているだぶついた包皮の縁をそつと撫でた。

「うあ、あつ……!? わ、悪かったね、包茎で」

遼太はたまらない恥ずかしさを不機嫌そうな態度に変えて呻くように言う。

指の腹でそろそろと亀頭と包皮の縁を撫でられ、口蓋を他人の指でくすぐられるような

ゾクゾク感が身体の中いっぱいに充滿した。

「……ホウケイ？」と頭の上に無数の「？」を浮かべて彼に聞き返すミラ。少年はいたたまれない気分になりながらも、わざと強がって包茎の意味をお姫様に解説した。

「……へえっ、そうなんですの。男の人の性器って面白いんですのね」

年頃の異性の肉体への興味というものには、貴族も平民も関係なく万国共通——いや、異世界共通らしい。包茎少年の話を聞いた巨乳の姫君はなおもまん丸に張りつめた包皮の縁を愛おしそうに撫でさすりつつ、潤んだ瞳を半分ほど姿を現す赤銅色の亀頭冠に向ける。たいして巨根でもなく、しかも皮まで被っている情けない一物をそんな目で見つめられ、遼太はいつそう恥ずかしさと切なさが募った。

「ではこうすれば……凶解通りになるんですのね♪」

「えっ？ うわわっ!？」

驚いた少年が間拔けな奇声をあげた時には、メイドドレスの巨乳少女の唇は極限まで窄められ、わずかに顔を覗かせた肉鈴にクチュッと密着していた。尿口に麻葉を塗り込んだ細針をツンと突き立てられたような灼熱感を覚え、遼太は背中を弓のように反り返らせて煩悶する。だが次の瞬間には、さらなる激感が彼のペニスを襲った。

ズルッ……ズルズルズルッ!! ミラが唇を窄めたまま、陰茎の根元に向かって顔を下降させ始めたのである。彼女の唇に剥かれ、ずるりと肉傘の下にまでずり落ちる包皮。美少

女姫の涎と自分自身の粘液にまみれた亀頭が彼女の眼前に露わになった。赤銅色の鈴口はとところどころに白い恥垢を付着させ、そのせいでふうんっとチーズ臭い腐臭を放っている。「ご、ごめんっ！ あの……その……」

「かまいませんわ。私のことなら、お気になさらないで♪ ぴちゃ、れるん……」薄桃色の髪の毛のメイド姫は紅潮した情熱的な美貌を遼太の亀頭に近づけ、唇から伸ばした舌で、恥垢をこそげるように肉肌をれるろると舐めあげる。そのたびに美少女姫の舌先がカリ首にめりこみ、ビリビリと恍惚の酸味が弾けた。まるでアイスクリームでも舐め立てるように丹念に舌を使い、亀頭の汚れを舌で舐め取る。彼女の舌がれるんっと跳ね上がるたび、少年の肉茎はあまりの気持ちよさにビクビクと上下にしまった。

「ソフッ、さあ、これで凶解通り♪ ……にゅぽん！ ちゅば、ぢゅるぢゅるっ……」

綺麗になった肉冠を満足そうに眺めて歌うように言ったかと思うと、姫さまは再びぱっくりとペニスをお口の中に咥え込み、左右に首を振り立てて荒々しい口奉仕を始めた。

剥き出しになったカリ首の縁をくまなくぐるぐると舐め回し、敏感な裏筋を何度も何度も舌で擦りあげる。繊細な快楽神経が集中し、しかも日頃は皮の中に大人しく身を潜めている亀頭を丸出しにされて舐め立てられたものではたまったものではない。遼太は加熱されて赤くなった快楽神経をそのまま舐めしごかれるような狂おしさを感じながら、疼くような快美感にうっとりとし耽溺した。

「ちゅう、ちゅば……不思議……亀頭って硬そうなのに、こんなに柔らかなんですのね」
舌で舐め転がしてみると意外にプニプニとして舌触りのいい鈴口の感触に感激しつつ、ミラは責め立てるターゲットをゆっくりと亀頭から肉棹全体に広げ出す。窄めた唇でキュッと遼太のペニスを締めつけつつ、上下に首を振り動かして、亀頭の先端から肉茎の根元まで舐めまくるハードなストローク。

「んっ、んっ……ちゅばちゅば……ぢゆる、れぢゆるれぢゆる……ぢゆる、ぴちゃ……」
「んああつ、や、やめて……あつ、ああつ、あつ……」

腑抜けになるとはまさにこのこと。相変わらず片手で玉袋を揉みこねられながらの口奉仕に、遼太は空気の抜けた風船みたいに身体中の力が萎えていくのを感じた。その代わり、夏雲みたいに充滿してくるのはピンク色の肉悦。キュンキュンとなめし草のように舐めしごかれる陰茎からしぶくように恍惚の淫撃が爆ぜ、目の裏でチカチカと七色の光が閃く。

（ああ、女の子の口でチンポを舐めてもらうって、こんなに気持ちいいものなんだ）
知ってはいけない快楽をこの歳で知ってしまったという、背徳的で、それゆえにいっそう耽美な悦楽。しかも自分の勃起を口に含んで卑猥な性の奉仕をしているのは、そんなところではお目にかかれない、情熱的で色っぽい美貌を持った真正の姫さまなのだ。

少年はカップに尻小玉を抜かれたようなふにやつとした心地になりながら、ちゅばちゅばと卑猥な舐め音を立てて自分の怒張を舐めしやぶるメイド姫の姿を見た。

「ちゆう、ちゅば……ああ、すごい。亀頭以外は、カチンカチン……れぢゅれぢゅ……」
えぐれるように窪む左右のほっぺに濃い影ができてるのがいやらしい。

魚を丸呑みする鵜のように根元まで陰茎を咥え込んだミラは、唾液でぬめる茎肌唇粘膜と鼻の下を引き伸ばされながらズルズルとペニスの先端まで後退し、肉傘の出っ張り部分まで来ると、亀頭冠の形に唇の周囲をこんもりと盛り上げ、にゅぽんと赤銅色の鈴口を口の中から飛び出させる。そして一転して、唇の粘膜を内側にめりこませながら陰茎を下降し、勢いよく根元まで口の中に咥え込んだかと思うと、片側のほっぺにグボツと亀頭の形を盛り上がらせ、形のいい楕円形の鼻孔が横長の楕円形に下品に引き伸ばされる。

「うわあつ、ああ、き、気持ちいい……くはあつ……おっ、おっ……」

「ちゅば、ぢゆる、れぢゅれぢゅ、んっ、んっ……ちゅば、ぢゆる、ぢゆるぢゅる……」
一ストロークごとに次第に激しく、そして速くなる情熱的な姫さまの口腔ピストン。たつぷりの唾液が桃色のペニスを卑猥にぬめ光らせ、隆起した青筋に沿って白い唾液の泡が無数に付着する。興奮の増したミラはさらに唇を窄めたのか、遼太はゼリーを搾り出されるチューブのように、肉茎を思いきり揉みしごかれる激感に狼狽した呻きを漏らした。

「ブジュッ!? たまらず尿道から噴き出す濃密なカウパー液。口の中に異変を感じたメイド姫が「むうっ!」と眉をたわめ、先走り汁をお漏らした亀頭の先端を舌で舐め立てる。「むはあつ、ちゅば……い、今のは? ま、まさか……これが、精液……?」

「ああ、違う……今のは、さ、先走り汁っていうんだ……くはあつ……!?」

「ああ、そうそう、知ってますわ。つてことは、もう射精準備完了つてことですわね！」
色っぽく潤んだ瞳で遼太を見上げてそう言うのと、メイド姫はさらに巨乳をたぶたと踊らせ、両側のほっぺを窪ませて激しいストロークをする。それはまさに、少年を一気に射精の絶頂に追いつめようとする淫らな責め。鈴口から根元まで、どこを舐められてもビリビリと強烈な快感電流が走り出していた遼太は、ペニスを襲う恍惚の激震に打ち震え、もう一度ミラの口の中にブブツと透明なガマン汁をしぶかせた。

美少女姫は髪につけたカチューシャと薔薇の飾りをリズミカルに揺らし、くぐもつた呻きを漏らしながら、その口で陰茎を、その手で陰囊を責め立てる。彼女が二つの胡桃くるみを揉み転がすようにして愛撫する睾丸たちが痺れを増し、わずかな痛みさえもがマゾヒスティックな快感へと変質した。じゅぼじゅぼ、にちゃにちゃと薄暗い蠟燭の明かりに照らされた部屋に響く下品極まりない唾液音。少年の射精衝動が一気に膨張する。

「ああ、ミ、ミラ!? 出ちゃう! もう……射精しちゃうよおっ!?」

遼太が上ずつた声でそう訴えると、ミラはフンフンと熱い鼻息を漏らして少年の陰毛をそよがせながら――、

「出して! 見たいんですの、男の人のチンチンが射精する瞬間を! さあ、見せて!!」
と叫び、さらに激しく首を振り立てる。



「じゅぼじゅぼじゅぼっ!! ぴちゃぴちゃぴちゃ……じゅぼっじゅぼっじゅぼっ!!」

「うああっ、出るっ! ああ、出ちゃうっ! 出る出る出る出るっ!!」

我知らず浮き上がる腰。龟头がミラの喉奥にまで勢いよく飛び込む。

ヌルヌルしたほっぺの裏側の粘膜がたまらない。ザラついた舌の感触がたまらない。寧ろ丸を揉み潰されそうな、姫さまの卑猥な手の動きがたまらない!!

「ああ、もうダメだあっ! うわああああああっ!!」

「じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ!! ——にゅほんっ!!」

思いきり唇で遼太の男根をしごき抜いたミラは、少年の情けない叫び声を聞き届けると、突然その唇からペニスを放した。と——!?

ぶぢゆるっ! びゆるびゆるっ! どびゅっ!! どびゅっ、ぶぢゅぶぢゅううっ!!

天を向いて反り返った怒張の先端から、長く白い糸を引いて勢いよく飛び出す白濁粘液。ポニーテールのメイド姫はいきなり自分の顔を襲ったザーメンの襲撃に、逃げることでさえできず「ひいっ!」と息を飲んで両目をつむる。ピチャピチャと湿った爆ぜ音を立てて姫さまの紅潮した美貌を叩く新鮮な子種汁。派手な脈動を始めた少年の肉ポンプはなかなか波打つのをやめず、次から次へと新たな精液を射出した。巨乳の姫君は息もできず、その顔はあっという間にドロドロに穢れ、そこから白い粘液を垂らし出す。

「あっ、ああっ……ご、ごめん……ミラ……」

思いがけず彼女に顔面シャワーを浴びせかけてしまったおたく少年は、バックをしたようにその美貌を白濁一色に染めた妖艶な姫君に、おろおろしながら謝罪した。

だがメイド姫は彼の粗相をさほど、いや、まったく気にしていない様子で――、

「うっ……むああっ、っ、ああ……精液ってこんな匂いをするんですね。すごい……」
などと鼻の穴をひくひくと開閉させてザーメンが放つ栗の花のような生臭い匂いをうつとりと堪能している。彼女が目をぱちくりさせるたびに上下の瞼の間に橋を架けた精液の糸が伸びたり縮んだりし、生温かな白い湯気がその顔からほんわかと立ちのぼった。

「ああ、これが……殿方の精液の味なんですのね……ぴちゃぴちゃ……うふっ、苦い♪」
続いてミラは口の周りについた精液をぴちゃぴちゃと下品な音を立てて咀嚼し始める。その顔には、さっきまで以上の得えも言われぬ至福感が滲み出していた。

(な、何でもいいけど……とんでもないところに来ちゃった……かも……)

少年は射精の快感に酔って全身を弛緩させながらも、あらためて自分の先行きに不安な気持ちになり始めていた。

「あああつ！ あん！ だめえっ！ ひううっ！！ あんッ、やめてええっ!?」
過敏さを増して充血した牝粘膜ばかりか、剥き出しにされた勃起秘核までをもぬちゃぬちゃ、ぐちゃぐちゃと刺激されて、美少女姫の口から艶っぽい嬌声が跳ね上がった。

感じている。リゼッタだつて、感じてる。なのに、どうしてだめなんだ!?

少年は自分自身も肉悦の火焰に全身を燃え上がらせ、擦りあわせる性器から疼くような快感を閃かせながら、なおもプリンセスに哀願する。

「いいでしょ!? ねえ、いいでしょ!? リゼッタ、お願い！ いいって言つて!!」

こんなに近くににいるのに。身体と身体を密着させ、そればかりか、お互いのもつとも恥ずかしく、神聖な部分さえ戯れあわせているのに、どうして君は俺を拒否するの!?

「あああつ！ だめよ、遼太！ ああつ！ お願い、わ、分かつてええっ!!」

たつぷりの愛蜜を膣穴から溢れ出させ、遼太の陰茎に巨大なナメクジが這ったあとみたいな猥褻な汁を塗りたくりながら、それでも姫さまは頑固に彼の求めを拒んだ。

『気高き第一王子ジョファン様とは何から何まで違うでしょ。たとえ男子だったとしても、平民のあなたから学べるものなどたかが知れていてよ』

美少女姫と出会った日、彼女の口から出た愚弄の言葉が突如脳裏に蘇る。

平民。どうせ俺は、平民。王子には、どう抗ったってかなわない。

遼太の目にも、再び王族の紋章が縫い込まれた巨大な旗が飛び込んできた。

次の瞬間、紋章がぐにやりと歪む。彼の瞳に溢れ出した涙の滴のせいだった。

「うおおおおおっ!!」——とても自分の声とは思えない、邪悪な獣のような咆吼。少年は、発火したかのような身体にどす黒い怒りが漲るのを感じる。

「きゃあっ!? な、何をするの、遼太! ああああっ!」

威厳に満ちた舞踏会場の中に響き渡る貴族姫の悲鳴。叫び声の主は、狂気に憑かれた少年によってその身体をうつぶせにひっくり返された。遼太は彼女のえぐれるようにくびれた細い腰を両手で掴むと力を入れてそれを引っ張り、彼女を四つん這いの格好にさせる。生まれてからただの一度としてそんな格好になどなったことはなかったのだからうりゼッタは、「や、やめてえっ!」と引きつった声をあげながら赤ん坊のようにハイハイをして少年から逃れようとした。そんな美少女の細腰をもう一度掴んで背後の自分に引き寄せる。少年は彼女の臀部を覆う深紅のドレスを背中のように豪快にたくし上げる。

「やああっ!」と悲痛に裏返るツインテールの美少女の叫び声。巨大な水蜜桃にも似た桜色の尻肉が、ショーツに包装されたまま少年の眼前に晒される。歪んだ淫悦の虜とりと化した遼太は容赦しなかった。尻の谷間を覆う布を乱暴な手つきで脇へ押しのと、両手の指をミッシリと脂肪の詰まった弾力的な尻桃に食い込ませ、残酷なまでに無遠慮な手つきで二つの尻肉を左右に割る。

「い、いやああっ! 何するの、遼太!? そんなとこ、は、恥ずかしい!!」

少年によつてむりやり尻を高々と突き上げられ、不様に突つ伏す格好にさせられた姫さまは、黄色い悲鳴をほとぼしらせながら必死に尻桃を左右に振る。だが淫悦にかられた凌辱者と化した少年の前では、しよせん無駄な抵抗だった。遼太はそんな彼女の尻肉をさらに嗜虐的にむぎゅうつと鷲掴みにしていつそう左右に割り広げる。脇へずらされたシヨーツの布が、尻肉と一緒にさらに布地を伸ばした。柔らかかそうな尻肉の狭間から剥き出しになる、鶯色の尻肉。放射状に伸びた幾筋もの皺の中央にひっそりと窄まる菊蕾の眺めが少年の脳神経を熱く焼き焦がす。遼太は彼女の背後にがに股になつて腰を落とすと、猛る勃起に手を添え、肥大した亀頭冠を尻肉の窄まりに荒々しく押しつけた。

「——えっ!? な、何、遼太! 違う! そこは……そこはあっ!?」

ツインテールの髪に飾られた黄金の冠を揺らしながら、驚いたように煩悶の悲鳴をあげるリゼッタ。遼太はそんな彼女に躊躇することもなく、自分の腰をグイッと前に突き出す。ミチミチと尻肉が全方向に広がり、亀頭の先端が貴婦人の肛門に埋まった。

「い、痛いっ! 遼太! 遼太ああっ!! ひいいいいっ!」

「前は王子のためにとつておきたいんだろ!? なら、こっちだったらいいじゃないか!!」
サデイスティックな声でそう叫ぶと、少年はさらに乱暴に腰を前に突き出す。鎌首が潰れるように変形しながら、プリンセスのアナルににゅるんと飛び込んだ。半包茎の包皮が肛門の手前でズルッとひん剥け、裏側の粘膜を剥き出しにしながら直腸の中に侵入する。

「あああ！ 痛い！ 痛いっ！ あああああっ!!」

床に突っ伏して尻を突き上げた姫さまは痛みに耐えかねて悲愴な金切り声をあげる。両手の爪がガリガリと床を掻き、長い髪が激しく振り乱れた。

理不尽なまでの憤怒にかられた少年は桃色のペニスを彼女の直腸の中に根元まで入れると、息つく間もなく前後に腰をくねらせ始める。生徒会長の肛門による刺激は、まるで小さな輪ゴムで肉茎をギュッと締めつけられたような激感。入れても出しても肉幹を強烈にしごき立てる卑猥な肉環の衝撃と、肉傘の出っ張りを舐めるように擦り立ててくる排泄粘膜のぬめりに恍惚としながら、カクカクと激しく腰を動かした。

「い、いやあつ！ 遼太、やめてえ！ 痛い！ 痛いっ!! そんなとこ……そんなことするとこじゃないっ!! い、痛ッ！ あああああっ!!」

「しかたないじゃないか！ 俺だつて……俺だつて!？」

しゃくりあげそうになつてしまい、あとの言葉が続かない。少年は今にも泣き出しそうになりながら、同時に、とてつもない快美感に全身がゼリーみたいにとろけてしまいそうな甘酸っぱい心地にもなつていた。リゼッタを愛しいと思う気持ちが歪みきり、邪悪な征服欲へと変質している。美少女姫がいやがることをあえてすることで、自分の存在を認めたいという子供じみた激情。もっともつと姫さまを惨めに泣き叫ばせてみたいという悪辣な欲望に全身に粟粒みたいな鳥肌が立つ。

「あああつ！ いやあつ！ こ、こんなの……こんなのいやあつ、あああつ!!」

バックから激しく突かれ、可憐な貴婦人は移動途中の尺取り虫みたいに身をたわませた。快楽など微塵も感じられるはずもないと思っていたのに、思いがけず火花のように恍惚が弾け、美貌の生徒会長は狼狽する。

（ああ、何これ！ やだ、私ったら……お、お尻を犯されて……感じてるうっ!!）

あつてはならないことだった。貴族の娘がお尻でなんて。その刹那、背後で遼太が鼻を啜り込む音が聞こえ、美少女はキュンと胸を搾られる。

（な、泣いてる!? やだ、泣かないで、遼太！ か、可愛いっ!! ああ、感じちゃう!!）

ギュッと両目を閉じ、下唇を噛むプリンセスの表情があまりに艶っぽすぎて、遼太は目に涙を滲ませ、何度も鼻を啜りながら欲情する。高貴な身分の姫君を四つん這いにさせ、その糞門を凌辱しているという事実が、遼太の身と心に燃え上がるような興奮を注ぎ込む。「やめて！ もうやめてえっ！ 馬鹿！ 馬鹿馬鹿馬鹿あつ、ああ、ひいひいんっ!!」

えぐれるように窪む美少女の白い膝裏。バタバタと暴れる、深紅の靴を履いた細い足先。遼太が肉棒を叩き込むたび、ブルブルと尻肉がひしゃげ、むっちりした太ももにあでやかな筋肉が浮かぶ。何度も何度も、肉幹を搾り立てるように収縮する肛肉がたまらない。排



泄粘膜のぬめりは、今にも亀頭冠を溶解させるかと思うほどの気持ちよさだった。

「んああつ、お、俺もうっ!? あつあつあつ……あああつ!!」

一気に膨張する猛烈な射精衝動。肛肉の中に突き込むたび、そして豪快に抜き出すたび、鈴口や肉幹に酸味の混じった煮沸感が炸裂する。

ズンズンズンッ! ズンズンズンズンッ!!

「——ッ!? い、いや! いやいやいやっ!! やめてえええっ!」

牝の本能が、自分を犯す凌辱者に最後の瞬間が近づいていることを悟らせたのか。

キュートな美貌の貴族姫は激しくかぶりを振り——、

「いやあ! やめてええっ!! 抜いて! 抜いてよおっ! あああつ! ああああつ!」

と今にも泣きそうな声で喚く。だが、もう遼太はどうにも止まらない。ひたすら腰を前後に踊らせて肉亀を肛肉粘膜と擦りあわせ、びゅるっと先走り汁を姫さまの直腸の中に飛び散らせる。背筋を駆け抜ける強烈な電流。肛門の奥にツーンと痺れるような疼きが走り、陰囊の中で二つの睾丸が激しく踊る。

「ああ、もうだめ! 出る! 射精する! 出る出る出る出るっ!!」

「いやあつ! あああああつ! ああああああつ!!」

「うおおおおおおおつ!!」

プリンセスの排泄粘膜で心ゆくまでカリ首を擦り抜いた少年は、射精の瞬間、窮屈な肉

穴からちゅぽんつとペニスを引き抜くと、美少女の尻桃に亀頭の照準を合わせた。

ぶぢゅっ！ どびゅっ！ ぶぢゅぶぢゅぶぢゅ！！ どびゆるうっ！！

「ああああっ！ いやああああああっ！！」

尿口から長い糸を引き、薄桃色に火照った尻肉めがけて濃い白濁粘液がビチャビチャと飛び散っていく。むわんつと立ちのぼる夏草にも似た生臭い匂い。少年のザーメンを浴びたりゼッタの尻桃の肉肌や高級そうなショートツから白い湯気がほんわかと香り立つ。

たたり——。尻肉に糊のように張りついた精液が太もものほうに流れ、むちむちした太ももに淫猥な白い筋を残しながら窪んだ膝裏まで垂れ落ちた。

「はあああ……はあああ……はああ……はああ……ああ、遼太……」

少年の歪んだ肉悦の餌食となった高貴なプリンセスは、四つん這いのいやらしい格好のまま、肩で息をする。最後の一搾りまで精液を出し終え、ようやく理性を取り戻した遼太は、暗く陰鬱そうな顔になりながら、愛しい姫さまの背中をじっと見下ろした。

「……そうだよ。しよせん俺なんて、ただの平民だもん」

「えっ!?」——彼のひんやりした言葉に、姫さまはあわてて振り返った。

「ジョファン王子と幸せにね。リゼッタなら……絶対に選ばれるよ」

遼太はそう言うのと、急いで身繕いをして、その場にすくつと立った。

「今夜は……別の部屋に泊まるから」

射精し終わったばかりだというのに、恥悦に狂った脳髓はいまだにグツグツと沸騰し、さらに強烈な刺激を求めている。その証拠に、アメジストの娘の唾液と自分自身の精液で卑猥にコーティングされた彼の陰茎は、あまりの興奮のために、露を飛ばしながら何度もペシペシと自分の腹の肉に亀頭を叩きつけている。

そんな超発情状態の少年の叫びに、四人のプリンセスたちが淫靡な笑みで答える。

「分かっていてよ、遼太！ 私たちだって……はあはあ……おんなじ気持ちだもの！」

そう叫ぶと、リゼッタは誰はばかることなく己の劣情を剥き出しにして、草むらの上に膝立ちになっていた全裸の少年に飛びついていく。

「してっ！ してしてっ!! 遼太、よくってよ！ 私をあなたの好きにして!!」

感極まった声で叫びながら、青い髪の貴族姫は彼の顔にキスの雨を降らせた。

「ああ、リゼッタ！ リゼッタっ!! うおおおおおっ!!」—— 獐猛な肉欲に全身を蝕まれた少年は、自分に抱きついてきた肉感的な美乙女のドレスを剥いてたぶたと弾む量感たっぷりの乳房を露わにさせると、その身体をくるりと後ろ向きにさせる。

「ひいっ！ ああああっ!？」

そして少女の細い腰を後ろに引つ張って尻を高々と天に向かって突き上げさせると、今まで自分がしていたようなケダモノじみた四つん這いの体位にした。遼太は姫さまの下半身を覆っていた深紅のドレスの裾を掴むと、乱暴な動作でそれを腰の上までガバッとたく

し上げる。蒼い月明かりの中に、リゼッタのむちむちした尻桃が露わになり、ふるふると左右に揺れた。少年は問答無用の荒々しさで彼女の股ぐらを包装するショーツに手をかけると、ズルッと太ももの下のほうまでそれをずり下げる。もわんつと立ちのぼる白い湯気。下着と発情した淫肉の間に籠もっていた熱が蒼い闇の中に放散されたのだ。ブジュツと下品な音を立て、高貴な姫さまの肉割れから滴り落ちる、蜂蜜のような愛液。粘度の高いそれは長い糸を引いてプリンセスの肉穴から垂れ、振り子のようにブラブラと揺れた。

「ああ、リゼッタ……何ていやらしい……!! ああ、我慢できないいっ!!」

全身を煮えたぎるような痴情一色に染めぬいた少年は、四つん這いのプリンセスの背後ににじり寄ると、汗の微粒をいっばいに浮かせた蠱惑的な尻肉にグボツと十本の指を埋め、ぬめる肉粘膜に猛る怒張を突き入れた——ぬぷっ! ぬぶぬぶぬぶぬぶ!!

「ひはああっ!! ああ、気持ちいいいっ! 硬いチンチン、入ってきたああっ!!」

腹の底にペニスを叩き込まれた可憐な姫さまは、獣のような咆吼をあげると背中を海老みたいにしならせ、両手で地面の草むらを掻き走った。彼の陰茎を窮屈に搾り立てる、とろけきった肉壺。膣襞の位置さえすぐには分からないほど溶解しきった牝粘膜の重なるの中で、少年はフルスロットルで肉棒を抜き差しする。

ぬちゃぬちゃぬちゃっ! ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃっ!!

「あああ、すごいっ! 気持ちいい! 気持ちいいいっ!! あああっ!」

錯乱しきつたような色っぽい金切り声をあげ、姫さまはブルーの艶髪を狂ったように振り乱して煩悶した。シヨタ少年はそんな彼女のブラブラと激しく揺れる乳房を片手で掴むと、凌辱にも近い猛々しさでわしわしと揉みこね、蹂躪する。

「ひい、もつと！ もつと揉んで！ よくつてよ、遼太！ ああ、すぐよくつてよ!!」
お返しのように蜜壺を蠕動させて少年のペニスを甘酸っぱく搾り立てながら、ツインテールの貴族姫は引きつった嬌声を張り上げた。陰茎を搾られ、脳を直撃する強烈な稲妻。カクカクと腰を振るたび、束になった快楽神経をなめし革でしごかれていようような恍惚感が少年の身体を襲撃する。びゅるつとたまらず噴き出す先走り汁。窮屈な牝肉の重なりに圧迫されて亀頭がひしゃげ、潰されて、そのたびに熱湯が煮立つようなピンク色の狂熱が体内で炸裂する。彼の手に揉みこねられて無限に形を変えるたわわな乳鞠。人差し指の腹でスリスリと勃起乳首を擦ると、リゼッタの叫び声がさらに色っぽく跳ね上がった。

「おおっ！ ああ、乳首ビンビン、気持ちいいっ！ もうだめっ！ もうだめええっ!!」
恥悦に脳髓を蝕まれて我を忘れたプリンセスは、彼女のものとも思えない浅ましい卑語を喉からほとばしらせながら、狂ったように髪を振り乱した。少年は目の裏でチカチカと七色の光が閃くのを感じながら、激しい肉杭ピストンで彼女の蜜孔を掻き回す。

「あああつ！ イッチャう！ またイッチャうっ!! ああああああつ!!」
ビクンッ！ ビクビクッ!! 炒められる海老のように身体を派手に波打たせた可憐なツ

ンデレ娘は弾かれたように前につんのめり、草むらの中に勢いよく突っ伏した。

ズルリッ!! 美少女を串刺しにしていた少年のペニスが膣から抜け、よがり汁の露を吹き飛ばしながらブルブルと反り返る。リゼッタは小刻みに身体を痙攣させながら、「ああっ……はふうっ……♪」とアクメの余韻に耽溺した。

「いやあっ、遼太あ、私たちにもしてしてえ! 我慢できませんのおおっ!!」

少年に休むいとまも与えず、リゼッタの隣にさつきまで彼女がとっていたのと同じ獣の体位になって並んできたのは、ミラとエリーナだった。

ご丁寧に、二人ともすでに乳房を剥き出しにしている。

「よおし、こうなったら順番にチンポを入れてやるからねっ!! うおおおおっ!!」

遼太はそう叫ぶと、二人のプリンセスのドレスの裾を豪快に腰の上までたくし上げ、ズルッ! ズルッ! と順番に、卑猥なシミを滲ませた小さな三角の布を彼女たちの股ぐらから下ろした。揃いも揃って肉溝の中に薄い布を食い込ませていた二人のショーツはピヨンと長く前布を伸ばしたあとパチンと弾けてようやく淫裂から剥がれ、その反動で愛蜜の微粒を霧のように虚空に撒き散らす。ドロリ、ドロドロ——まずミラの牝肉から、続いてエリーナの秘割れから、コンデンスミルクのように白濁した淫蜜が垂れ落ちた。

「ああ、遼太、早くうっ! 待ちきれないっ!」

そう言って誘うようにプリプリと尻を振るミラに、少年は彼女の肉粘膜の中にズプリと

男根を突き入れた。全方向から強烈な力で押し返す熱いゼリー塊の中に怒張を挿入したような窮屈さ。リゼッタとの淫戯ですでにかなり高まってしまっていた遼太はあわてて肛門括約筋を窄め、息を詰めてカクカクと腰の前後動を開始した。

「あああつ！　すごい、お、おつきい！　遼太、いいんですのおつ！　おとおおつ!!」
淫婦のように妖艶な声をあげ、メイド姫はいやらしく尻を跳ね上げる。入れても出しても亀頭から噴き出すように弾ける酸味の混じったとてつもない恍惚感。少年は快樂神経を小刻みに切り刻まれるような肉悦に今にも泣きそうなほど興奮しながら、ミラの蜜壺をズボズボと攪拌し、膣壁の凹凸をえぐるように肉傘で擦過する。

「おおおつ！　気持ちいいい！　もつとお！　遼太、擦って擦って!!　ああああつ!!」
「いやあつ、遼太！　私にも早くうっ!!　待ちぼうけはいやですう!!」

そう言って両脚をばたつかせ、もう一刻の猶予もないという感じでエリーナが叫んだ。

「よし、それじゃエリーナには……そおらあああつ!!」

全裸のシヨタ少年はカクカクと腰を踊らせてメイドドレスの姫さまと発情性を擦りあわせながら、揃えて並べた人差し指と中指をニユポンッ！とあどけないロリロリプリンセスのピンクの肉園に突き込んだ。彼が指を埋めるやいなや、中から押し出されるようにして練乳愛蜜がブジュウツと溢れ出してくる。

「あはあああつ！　ああ、か、感じるううっ！　指なのに……ひはああああつ!!」

無数の恍惚神経繊維で織りなした究極の快樂スポットに二本の指を埋め込まれたメガネッ娘は可愛い嬌声を炸裂させ、あどけない美貌を月明かりに向けて仰け反らせる。

遼太はミラをペニスで責めながら、エリーナの肉壺に挿入した二本の指をVの字に開き、左右の肉粘膜を同時に擦り立てて激しい抜き差しを始めた。

「ひいっ！ 何これえっ!? 気持ちいいっ！ か、か、感じるですうううっ!!」

微細な凹凸を無数に浮かべた快樂粘膜をこそげるように擦られ、神官姫はけたたましい嬌声をあげる。少年は手首を返して粘膜を擦る位置をそのたびに変えながら、ぬるぬるとぬめる膣道を指で搔いた。幻想的な青色に染まる森の中に響く、美貌のプリンセス二人の狂ったような淫声と二つの蜜壺から爆ぜる下品な粘着音。大小二つの乳房がたふたと跳ね踊り、勃起した四つの乳首がメチャクチャなラインを描いて虚空を動き回る。

「ああ、すごいっ！ やだ、もうイッチャウ！ イッチャイそうですのおっ!!」

ピンク色の髪の毛のプリンセスがそう叫ぶと、エリーナも自分の熱気でメガネのレンズを曇らせながら、「きゃああつ、私もですうううっ!!」と絶叫する。

「もつと指でズボズボされたいのい！ きゃあ、気持ちいい！ たまらないっ!!」

「そらっ、二人で一緒にイッチャいなっ！ そらっ、そらっ、そらっ!!」

遼太は自分自身も股ぐらから閃くような気持ちよさに恍惚としながら、ペニスと指でガツガツと美少女二人を攻撃した。肉棒と指を膣奥深く埋め込むたび、しぶくように噴

き出してくる熱くドロツとしたぬめり。二人の陰毛は風呂にでも入ったかのようにずぶ濡れになって毛先を絡めあつている。

「きゃあつ、イク！ほんとにイッチャううつ！」

「私もおつ！ああ、気持ちいいですうつ！ひいいいっ!?」

腰と指のスピードを速める遼太。猥褻な攪拌音がさらに高まり、ついに――、
「きゃあああああああつ!!」

二人は同時に我を忘れた声をあげると、陸に揚がった魚のように身体を派手に躍らせて地面に頭からのめり込んだ。そして意識を朦朧とさせたまま横たわるリゼッタの横に並んでぐったりすると、はあはあと背中を激しく上下させて新鮮な空気を貪り吸う。

「はあはあ……ああ、ジルエット……ジルエット！」

少年は最後にただ一人残った誇り高き姫騎士に熱の籠もった声をかけた。

「ああ、遼太……遼太、私も、もう……!? お願いだ……お願いだあつ!!」

あまりの興奮にカチカチと上下の歯を打ち鳴らしたジルエットは、赤ん坊のようにハイハイをして彼に近づいてくる。否も応もない。遼太はたまらなく甘酸っぱい気持ちにかられながら、淫らな肉悦の化身と化した戦乙女に背後から抱きつくくと、乱暴な手つきで彼女の乳房を剥き出しにし、ドレスの裾をたくし上げて股間にピッタリと貼りついたショーツを膝のあたりまでずり下げる。彼女のショーツの裏布には糊のような恍惚の粘液がドロツ

「言つて、ジルエット！ エッチな言葉を……もつと聞かせて！ 聞かせてえっ!!」

孤高のプリンセスに卑語を強要し、少年は彼女の秘壺の中で愛蜜をシエイクしながら肉鬘とカリ首を激しく擦りあわせ、弾む乳房を搾乳じみた手つきで揉みしだく。まん丸に勃起したピンク色の乳首が、彼にしごかれるたびにキュッキュと天を向いて震えた。

「ああ、擦られてる……チンポの出っ張りにオマ○コの肉を……おおっ！ おおおっ!!」
「もつと！ ジルエット、ああ、もつとおっ!!」

美少女騎士の卑語にメチャクチャ興奮しながら、遼太はさらなる快楽をねだるかのよう
に激しく腰と手を動かして少女の恍惚地帯を蹂躪し、熱い吐息を少女の耳に吹きかける。

「オマ○コ！ ああ、オマ○コ最高だあつ！ 遼太のチンポに掻き回されて、死ぬほど気
持ちいいっ！ こんな初めて……ああ、尻の穴までウズウズするううっ!!」

「ジルエット！ ケツの穴……い、いや、ウンコの穴つて!!」

「おおおっ！ ケ、ケツの穴……ああ、ウンコの穴まで気持ちいいっ！ おおおおっ!!」
ジルエットは自分自身がハレンチにほとばしらせるあられもない卑語に羞恥と興奮を炙
られ、全身の快楽神経が焼き焦げるような沸騰感へと自らを追い立てていく。ドーパミン
を噴出させた少年はそんな彼女の膣奥に猛る勃起を叩き込み、熱湯風船のような乳房を揉
み潰さんばかりにまさぐりながら、男冥利に尽きるサディスティックな肉悦を貪り抜く。

「あああ、ジルエット……何ていやらしい……はあはあ、私も興奮しちゃう……!!」



そうやって一つに繋がる二人に這い寄ってきたのは、肉悦の女神と化したりゼッタだった。いや、彼女ばかりではない。アクメのあとの放蕩感から復活したミラとエリーナも、劣情に赤らんだ顔で、二人の周囲に群がってくる。

「ううっ、あのジルエットが……こんなエッチな言葉を言うなんて……ああっ」とミラ。
神官姫も肉欲に潤んだ瞳をメガネの奥で揺らめかせ、「ううっ、すごいですう」と呻く。
「ああ、やだっ、みんな、聞かないで！ 私のエッチな言葉っ!」

さすがの姫騎士もみんなの注目を一身に浴びて羞恥に身を焦がしたが、嗜虐心を増した少年は、もちろんそんな彼女を許さない。

「だめだよ、みんなの前でもっとエッチなこと言って。でないとやめちゃうよ!」
「い、いやあっ!? や、やめないで……もっと突いて……お願いだあっ!!」

恥も外聞もなく、背後を振り返ってジルエットは必死に懇願する。

「ああ、言つて、ジルエット……聞きたい、私たちも……はあはあ……」

ヌルヌルにとろけた秘唇を自分の手で円を描くように愛撫しながら、リゼッタが乞う。他の二人の娘も「そうよ、お願い!」と声を合わせ、思い思いに自分の陰唇を手で責め立てた。はあはあと熱い、湯気のようなみんなの吐息が戦乙女の身体をさらに加熱する。

「ううっ、こんな……こんなことって……はあはあ……ああ、興奮するううっ!」

「さあ、ジルエット、言つて! みんなももっと気持ちよくなれるから! さあっ!!」

奔馬に鞭打つような調子で、彼女を責め立てながら遼太がそう叫んだ。

「そら、マ○コ汁もすごいよ……俺の股間とマ○コの間を引いてるッ！」

「んああ、もうダメッ！ 何が何だか分からないいっ!!」——突然、姫騎士が絶叫した。

「みんな、ああ、見てっ！ チンポでオマ○コグチャグチャ掻き回されてるのおっ！ 糸引いちやう！ 気持ちよすぎて、マ○コからエッチな糸引いちやうっ！」

激しくかぶりを振り、ジルエットは「ひいっ!!」と嬌声を跳ね上げる。

「ああ、イッチやうっ！ 興奮するうっ！ イクイクイクッ……おとおおおおっ!!」

ビクビクビクビクッ!! まさに雷に打たれたようなエクスタシーとともに、美少女騎士は悶絶しながら草むらの中に飛び込んだ。

そして——じよじよ……じよじよ……じよじよ……おとおおっ……!!

「ひい、こんな……しっこ……しっこしちやった……ああ、たまらない……おおっ……」

なおも身体の中で燃え盛る肉悦の火焰に苦悶するかのようになり、仰向けになつて身体を引きつらせる姫騎士。そんな彼女の股ぐらに開いた亀裂から、金色の小便水がブシュパアアッと勢いよく湯気をあげて噴き上がる。あたり一面に充滿する濃密なアンモニアの淫臭。「ううっ、いやらしい……いやらしい……ああ、遼太……私もうダメえッ!!」

ジルエットのはしたないイキ姿を見てさらに興奮を増し、全身に粟粒のような鳥肌を立てたりゼッタが、愛くるしい金切り声を漏らして少年に抱きついていく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>